

《 賛助会員からひとこと 》

各メーカー様に順次原料情報あるいはトピックスをいただき、シリーズとして掲載しています。今回は、九鬼産業㈱様に「国産ごま栽培への取り組みについて」、岡村製油㈱様に「『綿実油』原料の世界動向について」と題し御寄稿いただきました。

国産ごま栽培への取り組みについて

九鬼産業株式会社
東京支店長 三宅耕二

●三重県産ごま栽培への取り組みについて

九鬼産業株式会社は明治 19 年に三重県四日市市にて製油業を起業、当時四日市周辺では菜種の栽培が盛んであり、その菜種を用い菜種油の製造所として設立されました。

設立当時には日本資本主義の父と称される渋沢栄一氏の助力も得ていたとの記録も残っております。

現在も四日市にて、創業時と変わらぬ伝統製法でごま油の製造を行っております。ごま油製品のほかにも、いりごま、すりごま等の食品ごまやペースト状のネリ胡麻、ごま塩、黒ごまラテなどのごま加工品と胡麻の総合メーカーとして様々な商品の製造販売を行っております。

三重県四日市に本社事務所、本社工場、三重県菰野町にネりごま、ごま加工品を製造する竹成工場（余談ですが、先日のカタールで開催されたサッカーワールドカップで日本代表として大活躍を遂げた、浅野琢磨選手は菰野町の出身です。）と全国 4 つの支店・営業所（東京・名古屋・大阪・福岡）を拠点としております。



国内で流通する 99.9%が海外産であるごまですが、国産ごまの需要は高い中、国産ごま原料が慢性的に不足している現状です。この状況を打破するべく、弊社では 2014 年から、三重県産ごまの栽培普及の活動に取り組んでおります。福祉事業所（障がい者施設）との農福連携による栽培推進や県内の農家の方々に協力仰ぎ、栽培面積の拡大を進めてまいりました。こうした取り組みにより 2015 年 11 月「三重県ごま栽培プロジェクト」が『フード・アクション・ニッポン アワード 2015』食文化・普及啓発部門（地域の食文化の活用や保護・継承を図る活動、国産農林水産物の消費拡大につながる普及啓発の活動）で三重県下初となる優秀賞を受賞しました。

それ以降も更なる普及を広げるため、栽培者への栽培研修会の開催や新規栽培者の掘り起こしを進めております。定期的な現地巡回や自社管理ほ場にて栽培試験を行い、栽培技術、知見を増やし、栽培現場へのフィードバックなどの活動を継続的に実施しており 2021 年には栽培者 52 件、栽培面積は 18.9ha まで拡大し、統計上では鹿児島県に次いで全国第 2 位の産地にまで拡大しています。

これらの活動が農林水産省の全国表彰事業である「第 9 回ディスカバー農山漁村の宝」において、「国産ごま取り扱い日本一への挑戦！」と題した取組みが東海農政局より「ビジネス・イノベーション部門」に選定され 2022 年 12 月に表彰式が執り行われました。



ごまの栽培は手作業体系が殆どです。かつては日本国内でも各地で栽培されていたそうですが、手間が掛る作物として敬遠され、徐々に栽培が衰退していきました。

日本でのごまの栽培適期は初夏～初秋に掛けてとなりますが、梅雨の長雨、冷夏、秋雨の影響により、生育が不良となることがあります。最盛期には背丈が 2m 近くにもなるごまは風にも弱く、収穫間際に台風に襲われ、1 夜にして畑が全滅することも珍しいことではありません。

栽培されている量が少ないために、栽培時に使用できる除草剤や殺虫剤もほとんど登録がされておらず、このことも日本国内のごま栽培が衰退した原因の一つと思われます。

当社は国産ごま普及に向けて、三重県、国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構、井関農機(株)、地元三重の農家様と設立されたコンソーシアムに参加し、生業としてごま栽培を成り立たせるために機械化を含めた栽培法の確立、適した品種の選抜、農薬登録への取り組み等進めてまいりました。

これらの取り組みが評価され、この度前述の「第9回ディスカバー農山漁村の宝」東海農政局より「ビジネス・イノベーション部門」に選定、表彰を受けることができました。

まだまだ収穫できる量は少なく、輸入品に頼らざるを得ない現状ですが、少しずつでもごま栽培面積を増やし、将来的には三重県産ごまを謳った商品を世に送り出せることを目標に継続した取り組みとしていきたいと考えております。

「綿実油」原料の世界動向について

岡村製油株式会社

取締役東京支店長 朝倉 俊洋

日本国内の植物油需要はコロナ禍の影響もあり、ここ 2.3 年は 2,400~2,500kt/年で推移しコロナ禍以前の 2,700kt/年の 90%内外に留まっている。この需要の中には「パーム油」「オリーブ油」等の輸入油が含まれておりその比率は 40%となっており国内需要における国内搾油比率は 60%でジリジリ減少しているのが現状である。

2020 年半ば以降植物油糧種子全般において価格高騰が始まり、「菜種油」原料ではその価格が 2022 年春には 2020 年初比で 2.5 倍にまで暴騰した。(大豆油原料も 1.9 倍まで) 現在は多少の落ち着きも見られるが「菜種」「大豆」とも 2020 年初比で 1.6-1.7 倍となっており原料高は依然継続している。

これらの情報は新聞及び Net で取り上げられ理解され易い所ではあるが、当社で搾油販売している「綿実油」原料である「綿実」については、「菜種」「大豆」とは違い相場もたっていないこともありその情報は乏しいものになっている。そこで、この場を借りて「綿実油原料(綿実)」の 2023 年現状と見通しについて述べさせていただきご理解を賜ればと思います。

「綿実」の産地は当然ながら「綿花」栽培をしている地域(国)となり、全世界で 41,000~42,000kt/年の生産となっている。この中で、北半球のインド・中国の 2 国が 50%強を占めている。残念ながら我が国において「食用」としてはこの 2 国からの輸入が出来ない状況が続いている。(遺伝子組み換え品種の未承認等)そこで、当社が輸入・使用出来る地域としては北半球では米国・トルコ・EU、南半球ではブラジル・豪州・アルゼンチンとなりその情報(生産量並びに作柄等)収集に努めるとともに購買担当者が定期的に現地へ赴き現状把握をし当社が安定した品質で安定生産出来るような買い付けを行っている。

北半球の 22/23 クロップ品は昨年(2022 年)9-11 月収穫されたものでインド・中国を除くと最大産地の米国は作付面積の 50%以上を占めるテキサス州の大旱魃により全米圃場放棄率は過去最大となり当初 5,000kt 以上が期待された生産量が 4,000kt を割り込む事態となった。(21/22 クロップ比でも約 80%▲20%) この大旱魃が明確になった 2022 年 8 月にはその価格は一段高となり継続している。23/24 クロップ(播種 2023 年 4 月以降)に期待したいところであるが「綿花相場の下落」「大旱魃の悪夢」がどう影響するかを注目している。因みに、消費地である米国内での「綿実油」価格は 2020 年秋時点では約\$1100/t であったものが 2022 年春には約\$2700 となり 2.5 倍まで跳ね上がった。2022 年末では多少の落ち着きを見せてはいるが約\$2350 で 2020 年秋比 2.2 倍となっている。(一方「菜種」は約\$1000/2020 年秋が約\$2400/2022 年春となりや

はり 2.5 倍まで跳ね上がったが、2022 年末には「菜種相場」の下落もあり約\$1650 となり 1.7 倍と落ち着きを見せ始めている。）

南半球は最大産地であるブラジルが 19/20 クロップ(2020 年 5-8 月収穫)4500kt 超の生産量が翌 20/21 クロップでは▲1,000kt の減産となり価格高騰が始まった。この減産はその他少しでも利益の出る穀物(大豆・コーン)の作付面積増やした為「綿花作付け面積」の減少によるものでその傾向は 21/22 クロップ(2022 年 5-8 月収穫)及び 22/23 クロップ(2023 年 5-8 月収穫予定)も継続している。故に価格も高値で張付いている。

それを補っているのが豪州(オーストラリア)でここ 2 年豊作で 22/23 クロップも豊作見込みとなっている。生産量増で価格軟化しても良さそうなものであるが輸出需要(特に中国)が旺盛なことと他国(米国・ブラジル)産綿実価格が高いことから高値圏で推移している。豪州産は他国産に比べて低油分(▲1-2%)の為搾油業者にとっては頭の痛い所である。

上述の通り、「綿実油原料である綿実」は汎用油原料が落ち着きを取り戻しているのとは違い世界的にみてここ 1-2 年は高値圏価格を覚悟せざるを得ない状況となっている。当社としては、国内に「綿実油が欲しい」と言って下さるお客様がおられる限り国内搾油に拘りを持ち品質確保並びに安定供給のための努力を継続していく所存です。 お客様にはご理解を頂けるようにこれまで以上にご説明をさせていただきますので引き続きご愛顧を頂けますようお願い申し上げます。

最後に、世界経済を不安定化させている「コロナ」「ウクライナ侵攻」が 1 日も早く終結することを心から祈願致します。

